

赤い糸の人

志田

雅美

出合い（幼少期）

彼と出会ったのは四歳の春だった。

家の近くの空き地を占領していたいじめっ子集団の中に彼はいた。

その頃、わたしは新宿区戸山町（現、百人町）の祖母の家から埼玉県草加市の生家に戻ってきたばかりだった。弟が重い病気にかかり、両親がわたしの面倒を見られなくなったため、二歳の時から祖母の家で暮らしていたのだった。

二年ぶりに生家に戻ってきたある日のこと、友達のいないわたしは一人空き地で遊んでいた。そこへやってきたのがいじめっ子集団だ。そのうちの一人が、どこで拾って来たのか長い棒を手に、「ここはおれらの遊び場だ」と怒鳴って、いきなりわたしを打ったのだ。今でも覚えている。その日の空の色と、風の匂いを。わたしを打った子の憎らしい顔も、着ていたセーターの色も、半ズボンから伸びた脚が粉をふいていたことも。

「わかったな、ちび。どっか行っちゃえ」

いじめっ子はそう言うと、もう一度わたしを打ってくるりと背を向けた。

悔しかったわたしは、泣きそうになるのをこらえ、その子に向かって石を投げた。

それからが大変だった。髪をつかまれ、引き倒され、もみくちやにされた。周りにはた

くさんの子がいたのに、誰もわたしを助けてくれなかった。が、一人の男の子が「おいやめろっ、こいつ女の子だぞっ」と叫ぶと、いじめっ子は手を止め、びっくりしたようにわたしを見下ろした。どうやら、わたしを男の子だと思っていたようだった。

そのけんかで、わたしは手のひらを二針縫う大怪我をした。だが、父や母には「転んだ」と嘘をついた。きっと二人は、怪我の原因がけんかだと知ったら怒り狂ったに違いない。しかも、相手は男の子だ。その子の家を探し、乗り込んで行つただろう。

そのことがあってからしばらくして、父の仕事の都合で荒川区町屋に引越しをした。わたしはその家から幼稚園に通い、週末には祖母の家にお泊りに行つた。

ピアノも習つた。塾へも行つた。手のひらの傷が癒えると共に、いじめっ子たちの記憶も薄れていった。

さらに二年の歳月が流れ、わたしたち家族はふたたび埼玉県草加市に戻つた。草加市に戻ると、わたしは地元の小学校に入学した。

学校に通い始めて少し経つた頃、廊下で懐かしい声を聞いた。あの日、「おい、やめろ」と叫んでけんかを止めてくれた子とよく似た声だった。鼻にかかっていたかすれている、特徴のある声だから一度聞いたら忘れない。あの子だ。あの子に違いないと確信した。

わたしは彼と友達になりたいと思つた。

再会（小学生）

今にして思えば、それがわたしの初恋だった。そうでなければ、名前も知らない男の子と友達になりたいとは思わなかっただろう。しかも、彼とはクラスが違い、話しかけるきっかけもなかった。それでも友達になりたかったのは、淡い思いがあったからだと思う。幸い、彼に近づくチャンスはすぐに訪れた。ある、休み時間のことだった。

その日、彼は数人の男の子と廊下で鬼ごっこをしていた。わたしと同じクラスの男の子も仲間の一人だった。「廊下を走っちゃいけません」という先生の注意も聞かず、「ぼくも」「わたしも」と仲間が増えていった。これはチャンスだ。わたしも仲間に入れてもらおう。そう思ったわたしは、喜び勇んで教室を飛び出した。

そこへ、彼が走ってきた。ものすごい勢いだった。あつと思った瞬間、体に衝撃が走った。「女の子が倒れたぞ」と誰かが叫ぶのを聞いた。

その後のことはよく覚えていない。気づいた時には保健室のベッドにいた。どうやら、倒れた時に頭を打つたらしい。後頭部に大きなたんこぶができていた。

放課後になって、彼がわたしのクラスにやってきた。近くで見ると彼は、やはり、あの時の男の子だった。だいぶ背が伸び、顔つきも少し変わっていたが、小麦色の肌と、しゅつ

と整った鼻と、切れ長の目はあの頃のままだ。また会えて嬉しかった。

わたしは嬉しさを隠すように、「なんの用よ」とぶっきらぼうに言った。

彼はしばらく黙っていたが、やがて「さつきはごめんね」と、つぶやいた。

そう言った時の彼は、まるで、雨に濡れた捨て犬のようだった。なんだかわいそうになつて、許してあげようと思つた。

だが、彼の余計な一言にすっかり気が変わった。「おまえ、おもしろい格好だったぞ」と言つたのだ。なんでも、スカートがめくれあがつて頭をすっぽり覆つていたという。恥ずかしくなつたわたしは、「あんたなんか大っ嫌い」と言つてぶりぶりしながら教室を出た。こんなことになるならスカートなんてはいてくるんじゃないやなかつたと激しく後悔した。

そのことがあつてから、わたしはズボンで登校するようになった。おかげで、倒れても転んでも「おもしろい格好」にはならなかつた。

彼とも仲良くなつた。きつかけは最悪だったが、友達になれて嬉しかった。

彼の名前はたかぎちかし。みんなに「ちか」と呼ばれていたもので、わたしもそう呼んだ。わたしたちはよく遊び、よくけんかした。二人そろつてしよつちゆう先生に叱られた。

そして、六年間一度も同じクラスにならないまま小学校を卒業した。その頃はまだ、彼と結婚する未来があるとは夢にも思わなかつた。

親友の定義（中学生）

うちとけて付き合える仲の良い友達を親友というなら、ちかしはわたしの親友だった。不思議なものだ。けんかの現場で出会い、突き飛ばされたことがきっかけで仲良くなつた彼と親友になるとは思いもしなかった。まして、四人兄弟の末っ子としてのびのび育てられた彼と、三人姉弟の長女として厳しく育てられたわたしは、水と油のように性格が違つていて衝突も多かった。それでも離れずにいたのは、足りない部分を補い合えるパートナーとして、互いを必要としていたからかもしれない。

ちかしとは中学二年でようやく同じクラスになった。

その頃の彼は「たかぎちかし」といえば知らない子はいないほどの有名人で、体育祭や球技大会のスターだった。スポーツ万能で、バスケット部のエースで、顔もそこそこ良かったので、人気者になる素質はじゆうぶんだつたといえる。当然、女の子にもとても人気があつて、何人もの女の子から交際を申し込まれていた。

そんな女の子たちにとつて、わたしは邪魔な存在だったのだろう。嫉妬した彼女たちにたびたび意地悪をされた。みんな、なんとかして彼のハートを射止めようと必死だったのだらう。十四歳とはいえ、考えることもやることも大人顔負けだった。

もつとも、わたしも負けてはいない。たいてい返り討ちにしてやった。その頃のわたしは箸にも棒にもかからない不良娘だった。

中学時代の思い出でひとつ、忘れられないことがある。朝礼の時間に貧血で倒れたわたしを彼が保健室に運んでくれたことだ。確か、夏休み前の全校朝会だった。校長先生の話がいつにも増して長かったのを覚えている。

「おい、大丈夫かっ」と叫んで彼が駆け寄ってきた。

そこから先の記憶がない。覚えているのは、懐かしい匂いとぬくもりに包まれた感覚だけだ。それは、長い時をかけて心の深部に沁みこんだもの。紛れもなく彼のものだった。

後日、わたしたちをよく知る小学校からの友達が、「あの時のちかの慌てようはふつうじやなかったぞ」と言った。「あいつはおまえのことが好きなんだよ」とも言った。が、わたしは「そんなわけない」と笑い飛ばした。彼がわたしを好きだなんて、苦手な科目で百点を取るほどありえないと思ったからだ。それに、彼はわたしがわたしらしくしていられる唯一の友達だ。その関係を大切にしていた。きっと、彼にとつてもそうだったはずだ。わたしの心には、わたししか知らない彼が住んでいた。

わたしは友達の言葉を胸に納め、これまで通り彼に接した。彼の気持ちを確かめてみたいという思いもあったが、結局、そんなチャンスもないまま中学を卒業した。

愛が生まれた日（高校生）

中学卒業後、ちかしとわたしは別々の高校に通い始めた。高校生になると、これまでのように会うこともなくなつた。このまま交流が途絶え、友達関係も終わってしまうのかもしれない。そう思うと、体の一部がもぎとられたような心細さを感じた。

だが、一学期が終わると同時に彼はふたたび我が家にくるようになった。「一緒に宿題をやるう」とか、「勉強を教えてくれ」と言つてはたびたびやってきた。おかげで寂しさは感じなくなつたが、反面、うつとうしくもあつた。わたしの留守に勝手に部屋に入つたり、ベッドに寝転んでいたりされるとなおさらだつた。彼とは幼い頃から姉弟のように育ってきたが、もはや子供ではない。「親しき仲にも礼儀あり」とわきまえてほしかつた。

そのことを彼に言つと、「おまえの母ちゃんがいいよつて言つたもん」と居直られた。母に確かめると、「ちかしくんだからいいよつて。パパが言つた」と言われた。父に確かめると、「確かにそう言つた」と言われた。

彼も彼だが父母も父母だ。腹が立つたわたしは、「女の子の部屋に勝手に入るなんてどういう神経してるのよ」と、怒つて彼を部屋から追い出したものだ。が、彼はまったく懲りず、その後もやりたい放題でしょつちゆうわたしを怒らせた。

そんなわたしたちに転機が訪れたのは、高校二年の冬のことだった。

その日わたしは、闘病中のお父さんが亡くなったと彼から報せを受け、着の身着のまま家を飛び出した。木枯らしの吹く寒い夜だった。青黒い空に、丸い大きな月が出ていた。

息せき切って駆けつけると、彼は玄関先で膝を抱えていた。その姿を見て、彼のおばあちゃんが亡くなった日のことを思い出した。確か、あの日の彼も膝を抱えていた。西の空が真っ赤に染まり、蟬が寂しげに鳴いていた。小学三年生の夏休みのことだった。

わたしは彼に近づき、そっと肩に触れた。すると、突然彼が泣き出した。わたしは驚き、言葉を失った。彼の涙を見るのは小学生の時以来だった。

それから、彼はわたしにしがみついて激しく泣いた。かける言葉もなく、わたしはその場に佇んだ。ひとしきり泣いた後、彼が「ごめん」と言った。そして、わたしの髪をぐしゃぐしゃ撫でて照れくさそうに笑った。

ふいに、胸の底から熱いものが込みあげてきた。それは、これまでに経験したことのない感情だった。

そのことがあってから、わたしはしばらく彼を遠ざけた。電話がかかってくることも出ず、訪ねてきても家に上げなかった。心の底に芽生えた思いを知られたくなかった。彼との友情が終わってしまいそうで怖かった。

突然のプロポーズ（十八歳）

高校を卒業してすぐ、ちかしにプロポーズされた。なんの前触れもなく突然だった。

「おまえのようなじやじや馬は、おれにしか飼いならせない」

それが彼のプロポーズの言葉だった。しかも、おしゃれなカッパルでいっぱいのカフェで大声で言われた。どれほど恥ずかしかったかしのれない。

無論、オーケーなどしない。彼を蹴飛ばして逃げた。彼が無神経なのはよく知っていたが、その時ばかりはさすがに許せなかった。

彼もよほど腹に据えかねたのだろう。わざわざ電話をしてきて、「おまえみたいなひどい女とはもう絶交だ」と怒号をあげた。それでけんかになった。かつてないほどの大喧嘩に、ひよつとして、彼とはこれきりになるかもしれないと思った。

ところがその一週間後、彼がスーツを着てわたしの家にやってきた。そして玄関先で腰を折り、「まさみさんをぼくにください」と、両親に向かって言った。

驚いた。彼のスーツ姿にも、そんなふるまいにも。だがもつと驚いたのは、父があっさり「うん、あげるよ」と言ったことだった。

こうしていとも簡単に結婚が決まり、その後、とんとん拍子に話が進んだ。不思議なこ

とに、誰ひとり反対する者はいなかった。だが、わたしは釈然としない思いを胸に抱えていた。あんなプロポーズの言葉では、彼の真意がわからなかったからだ。

そんなある日のこと、「やっぱり結婚するのはやめようか」と、彼が言い出した。

わたしは、「親まで巻き込んでおいて今更やめるとはどういうつもりよ」と、彼を責めた。

わたしの言葉に、彼は口を尖らせてうつむいたが、やがて顔を上げ、悲しい目でわたしを見つめた。その目は、雄弁に彼の心を語っていた。

わたしは彼の目に、激しく感情が波立ちながらも言った。

「やめてどうするのよ」

「きっぱり諦めるよ。もう二度とおまえとは会わない」

彼はそう言うと、寂しそうに笑った。

わたしはその時、彼がわたしを大切に思ってくれていることに気がついた。彼を失えないと思った。

そのことがあってから一年後、わたしたちは結婚した。出会って十六年目の初夏だった。後になって、あっさり結婚を許した理由を父に尋ねたところ、こんな答えが返ってきた。

「おまえのような勝気なわがまま娘、幼なじみのちかしくんしかもらい手がないと思った」どこかで聞いたようなせりふだな、と思った。

二人だけのしあわせ（十九歳）

結婚してから足立区西新井に引っ越した。木造モルタルの古いアパートだった。

間取りは二DKで、部屋にはテレビ、冷蔵庫、洗濯機などの家電の他は、ベッド、ガラスのテーブル、カセットデッキしかなかった。がらんとした部屋には生活感がなく、ある日、訪ねてきた母が「こんなところでよく暮らせるわね」と、呆れ顔で言った。

母の目には、わたしたちの暮らしがみじめに見えたのだろう。その後、給料はどのくらいもらっているのか、ちゃんと生活できているのかと取調べのような尋問が続き、あげく、「若いからといっても結婚したんだから、もっとしっかりしなさいよ」と叱られた。

「おまえの母ちゃん鬼だな。あそこままでずけずけ言われると、さすがにむかつくわー」

母が帰ったとたん、彼がそう言った。どうやら、「しっかりしなさい」としつこく言われたことに腹を立てているようだった。心配してくれるのはありがたいが、余計なお世話だと思つたようだ。母の言葉を逆手にとつて、「若いからといっても結婚したんだから、放っておいてくださいよ」と、喉まで出かかったという。

わたしはふてくされている彼に、「お母さんの言ったことなんて気にするのはよそうよ。どこに住んでたって、ちかどわたしがしあわせならいいじゃない」と言った。

すると、彼はころつと態度を変え、「そうか、そうだよな。わかった。おれ頑張るね。ぱりぱり働いて、がんがん稼いで、おまえのほしいものなんでも買ってやるからな。おまえの母ちゃんにも文句言われない男になるからな」と声を張り上げ、少年のように笑った。なんてかわいい人だろう。

胸がときめいた。彼にときめくなんて、初めてのことだった。

そのことがあつてから、わたしはどんどん彼を好きになつた。毎日新たな発見があり、そのたびにときめいた。彼とはつきあいが長く、なにもかも知り尽くしているつもりだったが、夫としての彼はこれまでの彼とは少し違つていた。

言葉の通り、彼は一生けんめい働いてくれた。わたしも頑張つて働いた。二人の給料を合わせ、少しずつ家具を買い揃えた。なにもない部屋にひとつふたつと家具が増えていくのは、喜びであり、楽しみでもあつた。

翌年の冬、わたしたちに子供が生まれた。待望の女の子だった。

子供が生まれると、彼はまた違う顔を見せた。おむつを替えたり、風呂呂に入れたり、嬉しそうに赤ん坊の世話をする彼を見て、わたしはいっそう彼を好きになつた。

しあわせだった。平凡な毎日だったが、心は満たされていた。「しあわせ」と思う瞬間を彼と分かち合い、歩んでいければ、他にはなにもいらな思つた。

すれ違う心（二十代）

西新井のアパートに六年住んでから、埼玉県草加市のマンションに引っ越した。駅前の三LDKで家賃は高かったが、収入が安定したのを機に思いきって決めた。スーパーマーケットや病院も近く、住み心地は快適だった。

その頃から、彼がやたらとものを買ってくれるようになった。それも、ブランドバッグや服など、高価なものばかりだった。友人は「羨ましい」と言ったが、わたしは複雑な気持ちだった。そんなことをしてくれなくても、じゅうぶんしあわせだったからだ。

そんなある日、彼からダイヤの指輪をプレゼントされた。結婚記念日のことだった。その日のことは未だに忘れられない。ちよつとした言葉のあやで、彼を傷つけてしまった。「ちよつと待つてよ。これ、いくらしたの」

包みを開けた瞬間、胸が痛んだ。彼の、もう何年も履いているぼろぼろの靴が頭を過ぎったのだ。それだけではない。よれよれのワイシャツも、くたびれたスーツも。この指輪を買わなければ、彼はじゅうぶん自分の必要を満たさずだった。

その気持ち顔に出てしまったのか、彼は眉をひそめ、「嬉しくないのか」と言った。わたしは言葉につまり、「こんなもの買ってくれなくてもよかったのに」とつぶやいた。

彼を思うがゆえだった。が、言葉が悪かった。すつかり、彼を怒らせてしまった。

「こんなものって、なんだよその言い方。おまえが喜ぶと思つてふんばつしたのに」

彼はそう言うと、わたしの手から指輪をもぎとつて放り投げた。

引つ込みがつかなくなつたわたしは、「こんなものを買うお金があつたら自分のものを買えばよかつたのに。ちかの靴ぼろぼろだよ。ワイシャツも、スーツも、よれよれでみつも無いよ。もつと自分のことにかまつてよ」と、つい言つてしまった。

すると彼は、「みつともなくて悪かつたな」と言い棄て、娘を連れてふいと家を出て行つた。ぼつんと一人部屋に残されたわたし。急に悲しくなつて涙がこぼれた。

ありがとうと素直に言えばよかつた。でも、言えなかつた。それだけでは伝えきれない深い思いがあつたのだ。

「なにもいらぬよ。ちかと一緒にいるだけでじゅうぶんしあわせだから。服も、バッグも、指輪も、なにもいらぬ。でも、ちかはわたしの喜ぶ顔が見たくてプレゼントをくれるんだよね。その気持ち嬉しい。だから、その気持ちを受け取るね。ありがとう」

今ならそう言えるのに、その頃のわたしは無器用だった。

それから、彼はしばらく不機嫌だった。指輪をすれば彼の機嫌もすぐになおつたのかもしれないが、意地つ張りなわたしはタンスの奥にしまいこみ、一度も身につけなかつた。

彼どの思い出のクライマックスは、なんといつても、家族で沖繩旅行をしたことだろう。旅そのものより、旅先で彼に言われたことが深く心に焼きついている。

それは、長い付き合いの中で初めて言われた愛の言葉だった。まして、誰もいない夜の渚を歩いている時のことだ。忘れようにも忘れられない。

こんなにロマンティックな夜はなかった。風の匂い。波の音。ひんやりと冷たい砂浜。遠くに見える灯台の灯り。満天の星。今でも、その時の情景がひとつひとつ心に浮かぶ。きつと彼は、とっておきの時間を二人で過ごすためにわたしを渚へ誘ったのだろう。

それなのに、わたしは彼の思いに応えられなかった。「やめてよ、柄にもないこと言うの」と、そっけなく言ってしまった。その言葉に、彼は困ったように顔を歪め、わたしから目を逸らした。「ごめんね」と言ったが、風にかき消されてしまった。

それから、彼はしばらくにも言わなかった。なにを考えているのか、物憂げな表情で海を見つめていた。風いだ海が夜空を映し、灯台の灯りが心臓の鼓動のように確かな点滅を繰り返していた。時々、海の彼方でボオーツと汽笛が鳴った。黙って海を見ている二人の間を風が吹きぬけていった。どれくらい時間が経っただろう。ふいに、彼が言った。

「なあ、生まれ変わって信じる？」

「そんなこと・・・」

考えたこともない。

言葉を呑みこみ、彼を見つめた。月に照らされ、青白く光った顔がすぐ傍にあった。手を伸ばせば触れられるほど近くににいるのに、何故か、彼を遠く感じた。

わたしはふっと寂しくなつて「どうしてそんなこと聞くの」と彼に尋ねた。

だが、彼はその問いには答えず、「おれは信じているよ」と、震える声で言った。

「だから、約束しよう。今度生まれ変わっても、また結婚するつて。おまえがどこにいようと、おれは必ずおまえを見つめるから」

彼はそう言うと、わたしをふところ引き寄せた。あつという間に、わたしは彼の腕の中にいた。彼の匂いがした。温かかった。

「愛してる」

もう一度、彼が言った。

「わたしも」と言おうとしたが、声にならなかった。それが、彼に言葉で愛を伝える最初で最後のチャンスだった。

旅行から戻って間もなく、彼は風のようにこの世を去った。事故だった。

死から命へ（四十代）

彼が亡くなった当時のことは、消しごむで消してしまったかのように、すっかり記憶がなくなっている。その頃のわたしは肉体的に生きているだけで感情的には死んでいたのだろう。心をなくすことで、かろうじて生きていたのだと思う。

心が生き返ったのはそれから五年後のことだ。友人の紹介で転職した会社にクリスチャンの女性がいた。その人に誘われ、教会を訪れたことがきっかけだった。

なぜ、教会に行く気になったのかはわからない。だが、「行かない」という選択肢はなかった。きつと、それが神さまの招きだったのだろう。そうでなければ、宗教に偏見を持っていたわたしが、クリスチャンの女性と親しくなることもなかったはずだ。

初めて教会を訪れた日のことは今でも鮮明に覚えている。その日、わたしは前奏のオルガンを聴いて泣いた。何者かに心を掴まれたような気がして、いつの間にか泣いていた。人前で泣いたことなどなかったわたしには、初めてのことであった。

それから、わたしは毎週教会に行くようになった。まるで、恋しい人に会えるかのように日曜日が待ち通しかった。不思議なことに、教会にいる時だけ孤独を感じなかった。なにか、とてつもなく大きな存在に体ごとすっぽり包まれているような感覚だった。

そうしていくうちに、わたしは洗礼を受けたいと思うようになった。教会に通い始めて半年経った頃だった。聖餐の恵みを受けられないことにひどく疎外感を覚え、「わたしもこの仲間に加わりたい」と強く思ったのが一番の理由だ。「もう少し考えてからにしたら」と言う人もいたが、わたしの気持ちは変わらなかった。

わたしは牧師先生に受洗の意志を伝えた。説教も聖書に書いてあることもよくわからないうちに、洗礼を受けたいと言ったら反対されるかもしれないと思つたが、「わからなくても大丈夫ですよ。洗礼はゴールではなくスタートですから」と言ってくれました。

牧師先生の言葉に励まされ、わたしの意志はいよいよ固まつた。両親にはまだ教会に通つていることも、洗礼を受けようとしていることも話していなかったが、後のことはすべて神さまにお委ねしようと思つた。

そしてわたしは、約一ヶ月の洗礼準備会の末、教会の人たちにあたたかく見守られ、洗礼を受けた。初めて教会を訪れた日から九か月後の、平成一九年九月二三日のことだった。

牧師先生が聖書の裏表紙にみことばを書いてくださった。

『キリストに結ばれる人は誰でも新しく創造された者なのです』(コリント五・一七)

それを見た時、わたしはキリストに結ばれて生まれ変わったのだと思つた。

「生まれ変わつてもまた結婚しよう」とつた彼を思い出し、ひたすら泣いた。

思い出に変わるまで（現在）

先日、アルバムを整理していて一枚の写真に目が留まった。中学二年の時に行った林間学校の写真だ。彼とわたしは私服で一緒に映っている、学生時代の唯一の集合写真だった。色とりどりの服を着て笑顔をつくるクラスメイトたちの中で、彼とわたしだけが赤い服を着ている。「結婚する人とは小指と小指が赤い糸で結ばれている」と祖母から聞いた、幼い頃を思い出して胸が熱くなった。

彼と出会ったのも、友情をあたためたのも、結婚したのも、偶然ではなかったのだと思う。若くして彼が亡くなったのもあらかじめ定められていたことと考えるのはとても悲しいが、彼が元気に生きていたらわたしは教会に行かなかっただろうし、神さまに会うことも、真の愛を知ることもなかった。そんな気がしてならない。

これを書いている平成三〇年八月現在、キリストに結ばれて十一年になる。

その間、病気にかかったり、職を失ったり、生活に困ったりと、数々の試みに遭った。眠れない夜を過ごしたことも、枕を濡らしたことも数えきれない。が、わたしは倒れなかった。神さまの御力は、弱さの中でこそ強く働かれるのだと実感した十一年だった。

さらにもうひとつ、わたしは大切なことを知った。人として生まれた者のうち、わたし

をほんとうに愛してくれたのは彼一人だということだ。彼はわたしにたくさんの思い出をくれた。それは時が経った今でも「愛された記憶」として心に刻まれている。だから、もはや悲しみはない。彼との思い出をそつと胸に抱え、神さまと共に歩んでいこうと思う。神さまを知らずに亡くなった彼の魂がどこへ行ったのか知らない。彼が信じていたように生まれ変わりがあるかどうかともわからない。が、もし生まれ変わりがあるのだとしたら、来世では神さまを信じる者同士として出会い、結婚したい。それがわたしの願いである。最後に、わたしたちの間に生まれた子供たちについて記す。

彼が亡くなった当時、高校を卒業したばかりだった娘は、悲しみを乗り越え、現在、仕事と家庭を両立させて逞しく生きている。また、二歳だった息子は高校三年生になった。幼かった息子には父親の記憶がまるでないらしいが、彼の優しさはしっかりと受け継いでいる。顔もよく似ている。彼が息子の中に生きている証しだと思う。

振り返ればこの十一年、止まない雨はないと信じて生きてきた。
今、ようやく雨が上がり、思い出に変わった。

これからも、わたしの行く道には困難が待ち受けているかもしれない。
だが、それらひとつひとつが、やがて宝物のような思い出に変えられると信じている。

愛唱聖句

*ルカ一二章二八節

今日は野にあつて、明日は炉に投げまれる草でさえ、
神はこのように装つてくださる。

*第二コリント一二章九〇節

むしろ大いに喜んで自分の弱さを誇りましょう。
なぜなら、わたしは弱いときにこそ強いからです。

*コヘレト四章九節

ひとりよりもふたりがいい。共に労苦すれば、その報いは良い。

愛唱賛美歌

*讚美歌一二〇番

いざうたえ友よ ベツレヘムの

*讚美歌三三三番

主よ我をば とらえたまえ